

平成15年の穂いもち多発生  
(2)冷害年における箱施用剤のいもち病防除効果

古川農業試験場

### 1 取り組みの背景

長期残効性箱施用剤は省力的防除法として、近年県内の4割以上の水田面積で普及しているが、普及以来多発年には遭遇しておらず、穂いもちに対する抑制効果については判然としなかった。しかし、本年のような出穂期間が長引き、出穂後も発生に好適な気象条件が続く場合、箱施用剤単用では穂いもちを抑制できず多発することが明らかとなった。

### 2 成果の概要

- 1) 箱施用剤の穂いもちに対する抑制効果は十分ではなく、穂いもち多発条件下における抑制効果は低い。
- 2) 穂いもち多発条件下では、別途穂いもち防除が必要である(図2)。
- 3) 箱施用剤と穂いもち茎葉散布剤の体系処理により、本年のような多発年においても、収量に対する影響を回避できる(図3)。

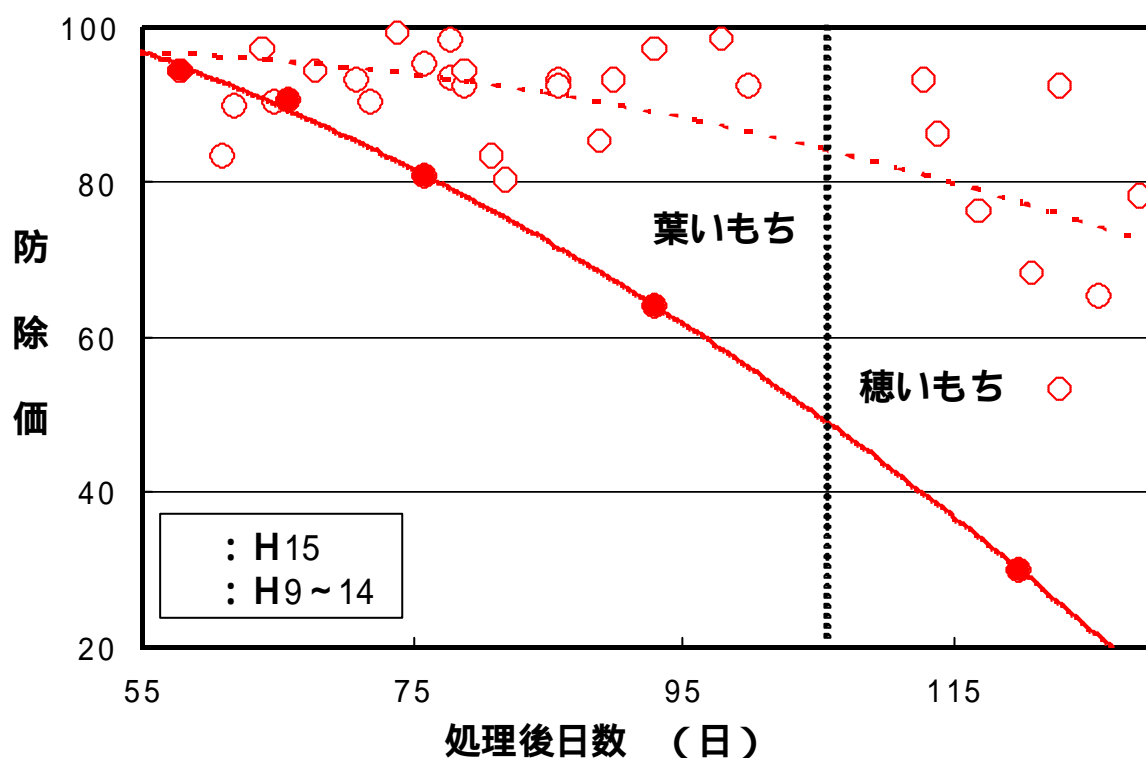


図1 ウィン箱粒剤処理後日数と防除価の推移(平成9~15年)

注) 防除価 = (無処理区発生量 - 試験区発生量) / 無処理区発生量 × 100

### 3 利活用の留意点

- 1) 箱施用剤はあくまで葉いもち防除剤であり、穂いもち防除は予防剤や茎葉散布剤等により別途実施する。
- 2) 現在普及している箱施用剤には、ウィン箱粒剤の他にDr.オリゼ箱粒剤、デラウス粒剤、デジタルコラトップ箱粒剤がある。

(問い合わせ先: 古川農業試験場作物保護部 電話0229-26-5108)

平成16年4月作成

#### 4 背景となった主要な試験研究

##### 1) 研究課題名及び研究期間

新農薬による病害虫防除試験：平成9年～15年

##### 2) 参考データ

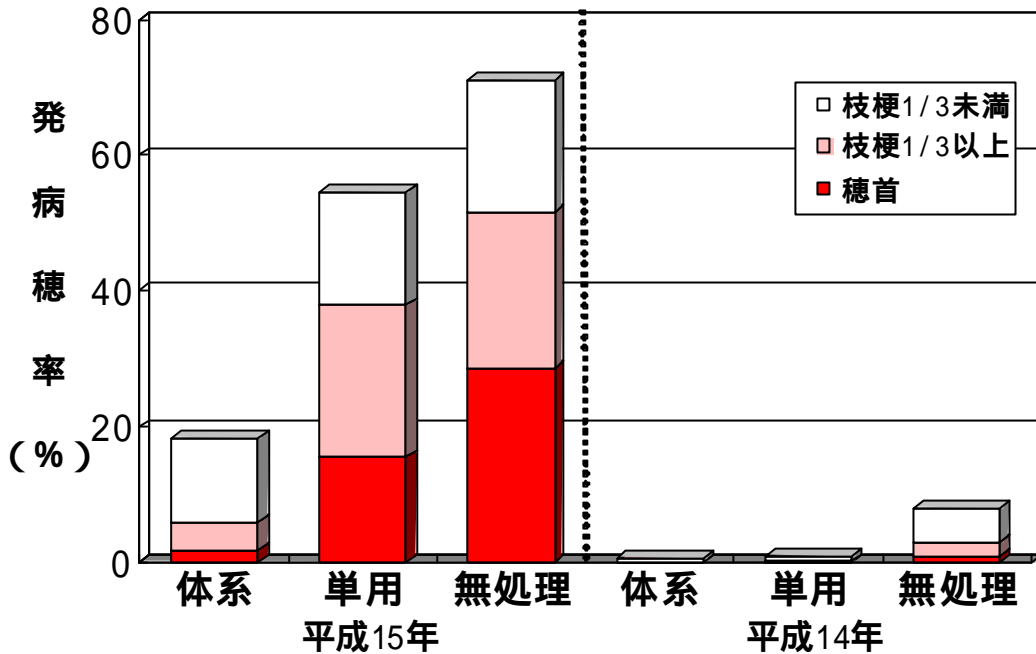


図2 ウィン箱粒剤単用及び体系処理での穂いもち防除効果

注) 箱施用剤単用：ウィン箱粒剤移植当日

箱施用剤体系：ウィン箱粒剤移植当日 + ブラシフロアブル穂揃期散布

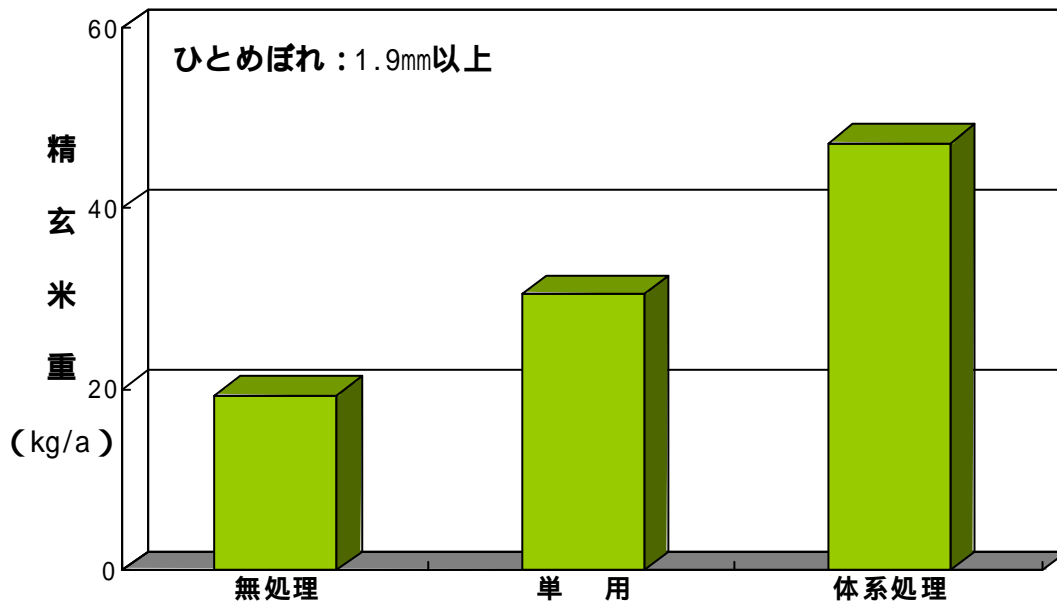


図3 ウィン箱粒剤単用と体系処理の収量比較 (平成15年)

注) 単用：ウィン箱粒剤：50g / 箱移植当日施用

体系：ウィン箱粒剤：50g / 箱移植当日施用 + ブラシフロアブル：1,000倍液150l / 10a穂揃期散布

##### 3) 発表論文等

特になし